

【東アジア言語文化講座・前期】

◆科目名：韓国・朝鮮語表現論演習 a

Studies of Korean Expressions (seminar) a

◇副題：

◇概要：

この授業では、韓国語学の基礎について学びます。

This course introduces the foundations of Korean linguistics to students taking this course.

◇担当教員：宇都木昭

Akira UTSUGI

◇開講時限：前期火曜 4 限

◇教室：(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい：

韓国・朝鮮語を話せるということと、韓国・朝鮮語について研究を行える(つまり、韓国・朝鮮語を言語学的に分析できる)ということは、異なる能力です。また、韓国・朝鮮語を話せれば韓国・朝鮮語を上手に教えられるとも限りません。さらに、言語を分析することと教えることも、区別する必要があるでしょう。

この授業では、韓国・朝鮮語の運用能力(いわゆる「語学力」)の向上ではなく、韓国・朝鮮語学の研究および韓国・朝鮮語教育の実践のための応用力を向上させることを目的とします。

この授業のねらいは以下のとおりです。

・韓国・朝鮮語をめぐる言語学的な諸問題を探し出す力、および、それに対して具体的にどのようにアプローチすべきかを考える力を養う。

・韓国・朝鮮語教育をめぐる、その諸問題を探し出す力、教育の方法について検討する力、および教育に貢献しうる研究のあり方について考える力を養う。

◇履修条件等：

韓国・朝鮮語の基礎的な運用能力を有すること。

◇講義内容：

学期の前半では、現代韓国・朝鮮語をめぐる音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、社会言語学の諸分野、および韓国・朝鮮語教育をめぐる、文献の内容についての発表と討論を行います。後半では、韓国・朝鮮語の教材において特定の文法項目がどのように扱われているかについて、発表と討論を行い

ます。

[授業方法および計画]

発表と討論を主体として授業を進めていきます。具体的には以下のとおりです。

- i. 初回と第 2 回目の授業では発表を行いません。初回は授業の進め方に関してガイダンスを行い、発表者と指定討論者を割り振ります。第 2 回では、言語の呼称をめぐる問題について、宇都木が講義をしたのち、全体で討論をします。
- ii. 第 3 回～第 9 回では、文献（主として本の一章）の内容について担当者に発表してもらいます。毎回、発表の後には全体で討論をするため、発表担当者以外の受講生にも事前に指定された文献を読んでおくことが求められます。
- iii. 第 10 回～第 15 回では、教材の分析をし、発表をしてもらいます。具体的には、朝鮮・韓国語の初級・中級で扱われる文字・発音・文法の項目の中から一つを選び、主要な教材や文法書においてどのような説明と練習問題の提示がなされているかについて整理するとともに、独自の提案をしてもらいます。

◇教科書・参考書等：

教科書は用いず、必要に応じてプリントを配布します。

<韓国・朝鮮語学の概説書>

李翊燮・李相億・蔡琬（2004）『韓国語概説』大修館書店

野間秀樹編（2007）『韓国語教育論講座 第 1 巻』くろしお出版

野間秀樹編（2012）『韓国語教育論講座 第 2 巻』くろしお出版

野間秀樹編（2008）『韓国語教育論講座 第 4 巻』くろしお出版

L. Brown & J. Yeon, eds. (2015) The handbook of Korean linguistics. Malden, MA: Wiley Blackwell.

I. Lee & R. Ramsey (2000) The Korean language. Albany, NY: State University of New York Press.

H.-M. Sohn (1999) The Korean language. Cambridge: Cambridge University Press.

I. Taylor & M. M. Taylor (2014) Writing and literacy in Chinese, Korean, and Japanese. Amsterdam: John Benjamins.

<韓国・朝鮮語の文法書>

韓国国立国語院 著、梅田博之・李允希 監修（2012）『標準韓国語文法辞典』アルク。

趙義成（2015）『基本ハングル文法』NHK 出版。

長渡陽一（2013）『初級を卒業した人のための韓国語文法』ナツメ社。

白峰子 著、野間秀樹 監修、大井秀明 訳（2004）『韓国語文法辞典』三修社。

◇授業期間中の課題：

学期中に 2 回以上発表をしてもらいます。また、学期末にはレポートを課します。

◇成績評価の方法：

発表（40%）、討論への参加状況（30%）、学期末レポート（30%）により評価します。

◇注意事項：

授業についていくには言語学の基礎知識が必要となります。言語学の基礎知識が不十分な学生には、自ら概説書に目を通したり授業の予習復習をきちんとしたりすることによって不足している知識を補うことが望まれます。一方で、授業中に基本的なことでも臆せず質問する態度も重要です。

◇オフィスアワー：

水曜 12:10-13:30

◇連絡先：

研究室：全学教育棟北 204

電子メール：utsugi@nagoya-u.jp

◆科目名：

現代中国語表現論演習 a

Studies of Modern Chinese Expressions (seminar) a

◇副題：

中国語学と中国語教育(1)

Chinese Grammar and Chinese Education (1)

◇概要：

本演習では中国語学に関する基礎的理解を深めると同時に、文法研究の方法論を身につけ、それを自身の研究で実践する力を養成する。また、中国語学と中国語教育のインタラクションについて具体的な事例を挙げながら学んでいく。

This course deals with the foundations of Chinese grammar and Chinese education. It also enhances the development of students' skill in making oral presentation.

◇担当教員：

勝川裕子

KATSUKAWA, Yuko

◇開講時限：

前期火曜 4 限

◇教室：

(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい：

(1) 中国語学に関する基礎的理解を深めると同時に、問題設定やアプローチの仕方等、文法研究の方法論を身につけ、それを自身の研究で実践する力を養成する。

(2) 本演習では、研究発表を通して自身の研究内容を論理的且つ効果的に伝える方法を習得すると同時に、学術討論及び質疑応答の経験を積み重ねることによりディベート力を培っていく。

◇履修条件等：

中国語で書かれた論文を題材として扱うため、中国語がある程度理解できること。後期(現代中国語表現論演習 b)も引き続き履修することが望ましい。

◇講義内容：

[概要]

言語の表現形式はその言語を使用する民族集団の事象・現象・心象に対する認識を反映している。本演習では、中国語母語話者が、空間・時間・数量・否定・可能などに関わる事象をどのように認識し、それがどのように言語化されているかについて、統語的、意味的側面から探っていく。同時に、日本語表現との比較対照を通じて、それぞれの言語内部に見られる種々の現象を有機的に関連付けていきたい。また、中国語教育において、日中対照研究の成果をいかに応用していくかについても併せて考えていく。

[授業方法および計画]

授業前半では中国語文法に関する個別の言語事象を取り上げ、関連する論文を輪読しながら討論する。授業後半では毎回、受講者による研究発表(20分)とそれに対する質疑応答(10分)を行う。発表担当者には、授業で取り上げたテーマ、もしくは中国語・日本語における任意の言語事象を取り上げ、問題点の整理と独自の分析・考察を発表してもらおう。原書講読の際には、必ず予習をしてくること。また、発表担当者は発表の1週間前までにレジュメを作成し、教員の添削、修正を経た上で発表に臨むこと。

◇教科書・参考書等：

プリントを配布する。その他、取り上げるテーマに関連する個別の参考文献等についても、授業時に随時紹介していく。

中国語文法の体系的把握や文法研究の方法論理解に役立つものとして、以下の文献を通読しておくことが望ましい。

- ① 朱德熙《語法講義》，商務印書館(邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社)
- ② 呂叔湘等著・馬慶株編《語法研究入門》，商務印書館
- ③ 陸儉明《現代漢語語法研究教程》，北京大学出版社

◇授業期間中の課題：

必要に応じて指示する。

◇成績評価の方法：

以下の 3 点に基づき、総合的に評価する。評価項目②③に関しては、特に言語専門の受講者は自身が関心を持つ任意の言語事象を取り上げ、関連付けて分析を深めていくことが望ましい。100 点満点として、60 点未満は D(不可)、60 点以上 70 点未満は C(可)、70 点以上 80 点未満は B(良)、80 点以上は A(優)となる。

- ① 授業(ディスカッション等)への参加度(30%)
- ② 研究発表(30%)
- ③ 学期末のレポート(40%)

◇注意事項：

本演習は受講者の人数、関心等に応じて内容を調整し、演習形式で進めるため、発表・ディスカッションを通じた積極的な参加を期待する。尚、専門分野を問わず、言語に対する強い関心や意欲のある学生の履修は大いに歓迎する。

◇オフィスアワー：

随時対応(事前にアポイントを取るのが望ましい)。

◇連絡先：

yuko-k@lang.nagoya-u.ac.jp

文系総合館 6 階 602 号室

◆科目名 漢民族文化論 a

Course name: Lecture on Han Nationality's Culture a

◇副題： 『墳』の研究 1

Subtitle: Research on *Grave(Fen)*

◇概要： 今年度から魯迅全集を、その第 1 巻の『墳』から読んで行く。注釈等をも含めて、緻密な解説、鑑賞、先行研究の調査を経て、魯迅文学の全体像を掴み、更にそこから中国近現代文学の輪郭ないし動脈とも言える中国近現代文学の思潮史をも、整理整頓して行くことである。

Abstract: To start from reading *Grave*, the 1st volume of the Complete Works of Luxun this year. Through appreciating, analyzing, interpreting the text, including the annotations closely and cautiously, our goal is to understand Luxun's literature as a whole, to find the outline of Chinese modern literature, the ideological trend of its development.

◇担当教員： 陳 朝輝

Lecturer: Chen Zhaohui

◇開講時限： 前期 木曜 6限

◇教室：(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい： 昨年度と同様、本授業の最大の目的・ねらいは、魯迅を軸にして中国近現代文学の鑑賞法または研究法を身に付けて行くことである。但し昨年度と違って、今年度はより原典の解読と鑑賞に時間を振り、短編中編と関係なく、個々の魯迅文学作品の魅力を実感することである。

◇履修条件等： 中国語で書かれた文献資料を読めること。

◇講義内容： 基本的には学習研究社版の『魯迅全集』(平成元年7月)と人民文学出版社版の『魯迅全集』(2005年11月)所収の『墳』を標準テキストとし、そこに収録してある作品を順番で読んで行くこと。具体的には、

- 1 回目 オリエンテーション
- 2 回目 題記
- 3 枚目 人の歴史
- 4 回目 科学史教編
- 5 回目 文化偏至論
- 6 回目 摩羅詩力説
- 7 回目 私の節烈観
- 8 回目 我々はいまいかにして父親となるか
- 9 回目 宋代民間のいわゆる小説およびその後
- 10 回目 ノラは家を出てからどうなったか
- 11 回目 天才の出るまえ
- 12 回目 雷峰塔の倒壊について 再び雷峰塔の倒壊について
- 13 回目 ひげの話
- 14 回目 写真を撮ることなどについて
- 15 回目 鏡をみて思う

◇教科書・参考書等： 日中両国に出ている各版の「魯迅全集」および選集。

◇授業期間中の課題： 自ら進んで、日中両国の各種の雑誌に掲載している『墳』

についての研究論文を調べること。

◇成績評価の方法： 1. 授業の出席状況；2. 調査発表の質；3. 期末レポート。

◇注意事項： 単位が必要でない聴講生も履修者と同様、調査発表を分担すること。

◇オフィスアワー： 水曜日午前9：00 ～ 14：00

◇連絡先： chen@lang.nagoya-u.ac.jp

◆科目名：現代中国語表現論 a

Studies of Modern Chinese Usage (a)

◇副題：中国語学の諸問題

Various Issues in Chinese Linguistics

◇概要：

現代中国語におけるある言語事象について、研究テーマとなりうる問題の所在を明らかにするとともに、形式・意味・語用・認知などの側面から、総合的に分析を加えていく。

In this course we will investigate various issues in Chinese language studies. Studying some linguistic phenomena of modern Chinese, we will investigate how the issues in them are defined and analyze them comprehensively from the viewpoints of style, meaning, pragmatics and cognition.

◇担当教員：丸尾誠 Maruo Makoto

◇開講時限：前期月曜3限

◇教室：(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい：

現代中国語における個別の言語事象を理論化していくプロセスを体験することにより、中国語学の基礎を修得するとともに、論理的な思考および応用力を養成することを目的とする。

本講義では、中国語学に関する中国語で書かれた論文(必要に応じて日本語で書かれたものを扱うこともある)の講読を通して、現代中国語における文法研究の方法論を身につけていく。

◇履修条件等：

中国語(“普通話”)の運用能力を有すること。後期(現代中国語表現論 b)も引き続き履修することが望ましい。

◇講義内容：

〔概要〕

- ①講義時には、一般言語学的な視点をも交えて、現代中国語の文法事項について相対的に論じる。
- ②一般言語学における言語理論が、往々にしてその特異性ばかりが強調されがちである中国語という言語を分析する際にどこまで有用かという問題についても併せて考えていく。
- ③履修の前提として中国語学のみならず、言語学・日本語学・英語学などの知識をある程度有することが望ましい。従って、専門外の学生については、必要に応じて当該事項や概念・用語を調べてくることを別途課題として課すことがある。

〔授業方法および計画〕

開講時より数回にわたって中国語の文法概念・文法的特徴などを論じ、その後、論文講読を通して個別の具体的な問題を扱う。日本語に訳していく過程において、適宜用語や概念の解説を行う。講読する論文については、必ず予習をしてくること。

◇教科書・参考書等：

プリントを配布する。学界の動向をも見据えつつ、定期的に刊行される学術雑誌の新しい論文・著書に細心の注意を払い、必要に応じてそれを教材として使用することもある。

取り扱うテーマに関連する個別の専門書・論文等については授業時に適宜紹介するものの、中国語の文法を体系的に理解し、理論を構築していく際の前提となるものとして、以下に挙げるものに常日頃目を通して、文法研究の方法論を把握しておくことが望ましい。

- ① 朱徳熙《語法講義》，商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）
- ② 朱徳熙《語法答問》，商務印書館（邦訳：『文法のはなし－朱徳熙教授の文法問答－』中川正之・木村英樹編訳，光生館） ※この②については邦訳本の方に訳者による詳しい注釈がついており、参考になるところが大きい。
- ③ 輿水優『中国語の語法の話－中国語文法概論－』，光生館

◇授業期間中の課題：必要に応じて指示する。

◇成績評価の方法：

学期末レポート（80%）および出席・討論への積極的な参加などによる平常点（20%）。レポートを提出しない場合には「欠席」扱いとする。レポートの課題は原則として授業で扱った複数のテーマの中から選択できる形式とし、

その中に「自分の興味のある文法事象」について自由に論じるものも入れる予定である。その場合、問題の発掘という点が、とりわけ重要となる。

◇注意事項：特になし。

◇オフィスアワー：

メールでの質問などは常に受け付ける。オフィスアワーは、メールなどにより、個別に設定する。

◇連絡先：maruo@lang.nagoya-u.ac.jp

◆科目名：東アジア言語論演習 a

Studies of East Asian Languages (Seminar) a

◇副題：バルト・スラヴ語アクセント学の諸問題

Problems of Baltic and Slavic accentology

◇概要：

この授業はバルト・スラヴ語のアクセント法の歴史について学ぶ。授業の前半では、バルト・スラヴ語のアクセント法の理論にとっての鍵となるアクセント法則を扱う。後半では、バルト・スラヴ語のアクセント体系と印欧祖語のアクセント体系の関係を扱う。

The aim of this seminar is to introduce the history of Baltic and Slavic accentuation. The course of the first semester deals with some accent laws as the keystone for the theory of Balto-Slavic accentuation. The course of the second semester deals with the relationship between Balto-Slavic accentual systems and the Proto-Indo-European accentual system.

◇担当教員：柳沢民雄

Yanagisawa Tamio

◇開講時限：前期水曜 2 限

◇教室：(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい：

19 世紀以来、バルト・スラヴ語のアクセント法研究は印欧語学の巨匠達によって行われてきた。それらの研究は、彼らの名前をつけたアクセント法則として知られている：例えば、レスキーン法の法則、ソシュールの法則、ヒルトの法則、等々。バルト・スラヴ語の比較歴史的アクセント論はかなり複雑で分かりにくいテーマであるが、最近には概説書も出版されているので、このテーマへの接近は以前に比べると容易になっている。前期の授業では、基本的なアクセント法則を、オリジナルなテキストを読むことによって、理解することを目標にしている。

◇履修条件等：

特になし。

◇講義内容：

〔概要〕

前期は、バルト・スラヴ語の主要なアクセント法則を理解することを目標にしている。授業で採り上げるアクセント法則は、Leskien's law, de Saussure's law, Hirt's law, Pedersen's law, Winter's law である。授業ではそれに関わるオリジナルな論文を読む。参考資料も併せて読むことが必要である。授業は以下の順序で読み進める：

1. Leskien's law

テキスト：

Leskien, A. Die Quantitätsverhältnisse im Auslaut des Litauischen. *AsIPh*, Bd. V, 1881. pp. 188-190 を読む。

2. de Saussure's law

テキスト：

de Saussure, F. Accentuation lituanienne, *IF*, VI, Anzeiger, 1896, pp. 157-166. (*Recueil des publications scientifiques Ferdinand de Saussure*, Genève, 1921. pp. 527-538.) を読む。

3. Hirt's law

テキスト：

Hirt, H. *Der indogermanische Akzent*. Strassburg: Trübner, 1895.

Illich-Svitych, V. M. *Imennaja akcentuacija v baltijskom i slavjanskom*. Moskva. 1963. pp. 78-81.

4. Pedersen's law

テキスト：

Pedersen, H. *Études lituanienne*. København: Levin & Munksgaard. 1933.

5. Winter's law

テキスト：

Winter, W. The distribution of short and long vowels in stems of the type Lith. *ėsti* : *vėsti* : *mėsti* and OCS *jasti* : *vesti* : *mesti* in Baltic and Slavic languages. *Recent developments in historical phonology*. The Hague: Mouton. 1978, pp. 431-446.

一般的な参考書・概説書：

Stang, Chr. *Vergleichende Grammatik der Baltischen Sprachen*. Oslo, 1966.

Garde, P. *Histoire de l'accentuation Slave*. I. Paris. 1976.

Kortlandt, F. *Baltica & Balto-Slavica*. Amsterdam - New York: Rodopi, 2009.

Sukač, R. *Introduction to Proto-Indo-European and Balto-Slavic Accentology*.

Cambridge Scholars Publishing, 2013.

◇授業期間中の課題：必要に応じて指示する。

◇成績評価の方法：

履修取り下げ制度を採用する。

評価は口頭発表とレポートを各 50 パーセントとして評価する

◇注意事項：特になし。

◇オフィスアワー：

メールでの質問などは常に受け付ける。オフィスアワーは、メールなどにより、個別に設定する。

◇連絡先：k46413a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp